ガスと暮らしのモノがたり ◆第7回◆

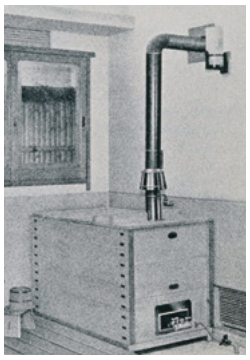
昭和❸

お湯のある暮らしはガスとともに

〈ガス風呂の変遷〉

昭和10年代

首都圏の同潤会アパートなど、一部の集合住宅に共同のガス風呂があった。風呂釜（左）に種火を点けるところ。



昭和30年代

浴槽は木製だが、この頃から量産性に優れたFRP（合成樹脂）製も登場。風呂釜は排気用の煙突を備えていた。

昭和40年代

シャワー付きバランス風呂釜が登場。給排気口を集約し煙突が不要に。プラスチックすのこ（手前）などもこの時代の定番。

昭和50年代

風呂釜と給湯器が一体化、さらに屋外設置となったことで浴室は広々。壁には全自動リモコンも。

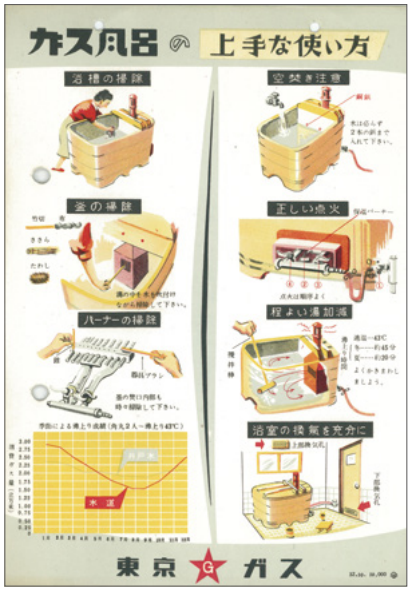
団地ブームの到来によって、ダイニングキッチンと並んで浴室も身近な存在になりました。昭和30年代の後半には銭湯に代わって内風呂の普及率が約6割に達し、毎日家でお風呂に入れる夢のような暮らしが実現します。この時代の象徴的な出来事として、昭和35（1960）年にポリ容器の液体シャンプーが発売され、それまでの粉末タイプや固形石鹸から使い勝手が大きく向上。月数回程度だった女性の洗髪回数は数日おきになり、身だしなみも洗練されたものになっていきます。

快適なバスタイムの実現に、大きく貢献したのがガス機器です。なかでも昭和40（1965）年に登場したバランス風呂釜は、公団住宅のスタンダードとして全国に普及。給気と排気のバランスを取ることで不完全燃焼を防止し、気密性が向上した鉄筋コンクリート住宅にマッチした安全性を備えました。

安全・安心への取り組みが本格化したのも、昭和30年代からでした。たとえば東京ガスはいち早く、昭和32（1957）年にすべてのお客さま（当時約114万件）を対象とした中毒防止巡回をスタート。後にガス事業法で定期保安点検が義務付けられ、現在に至ります。

バランス風呂釜にはシャワー付きタイプもお目見えし、アメリカのTVドラマなどで憧れの存在だったシャワーのある浴室が家にやって来ます。昭和54（1979）年には給湯器付風呂釜が登場。それまで浴室には風呂釜、洗面所や台所には湯沸器と個別に機器を設置していたのが、1台で1戸すべてのお湯を賄えるようになります。こうして家じゅうどこでも蛇口をひねればすぐにお湯が出る環境が整い、昭和60年代には出かける前に洗髪をする〝朝シャン〟も話題になりました。

そして平成に入り、給湯器付風呂釜は高い給湯能力とコンパクト化の両立を図りながら、現在の〈エコジョーズ〉に代表される高効率給湯器へと進化を遂げていきます。海外からは〝うさぎ小屋〟と評された日本の住宅事情ですが、設置スペースの制約という課題へのチャレンジを通して、コンパクトで使い勝手が良く、安全・安心で省エネという、世界トップレベルのお湯まわりを手に入れることができたのです。これからもより良い暮らしを届けるために、ガス業界の取り組みは続いていきます。



ガス風呂の普及にともない、正しい点火方法など安全を周知するチラシも作成（東京ガス）。